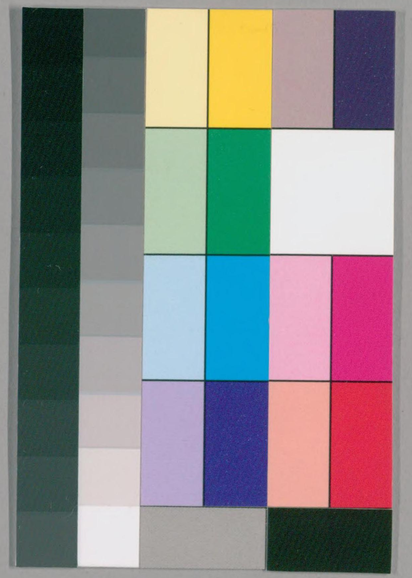


国立国会図書館　タイトル『源氏物語』 請求記号 856-10

ガラス使用

856-10

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

さらぎて、いとゞ物さらがしかりけ
まぎれふ。しこのことも見来なく
て、日ぐらしぬ。よろづけうちたれば
いのりのしるしまや、ことなる事なく
てをこゝろ給ぬまゝ、程なくゞりなや
ましたさまことつけなていづく
まもはありきなどいしなりず。の
どやかなるひるつかた、我はかたまな
がめふしまゐるまゝのゆかりれこしい
集れつゝ、をくめしよせて、なやましう
しつるなりしを、人めしげうむけか
しうて、この山東しらぬ、いとふぶ
きにまもさで今これよりすぐま
ゆけよ。此度ごまもうぬしきて
かりきなば、いこしうしいふひなら
むとて、此文ありけり。海うちやめ

ていそぎなれども、日さけて出たら
なれば、ひかげくらうなる程まぎ
りつきぬる。かしこまれ。例の海ぎ
るかたなくながめまゝ、雨なるに
あなたより人きて、尼君にかく
などさくめきゆゑれば、思ひかけぬ
かどまもとおどろかれて、何ごゝろ
ゆゑ、絵へことくしかるべき人まもを
いせざめるを、さのこいたしいなれ
まて、いかまゆしとおぼすんといと
をしがりて、おさ聞しうしるあり
あるぬ、つれなきなりやと、ひどま
いつもいとくるしと思ひしら、海
を例のこなくにといとせられば
あまゝ出て、すのこのりしつかたま
ついぬるり、尼君いざり出て、家と

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

ゆへことなりけるいあしかりなんとて
まつるさまこまかにゆゑ日びもさぞ
どあしかるまさてあしことなれど
うつとはしひあらぬまげよとさて
おもはすしん めづらかるあさまさう
ぞ ありぬさまさへなりあはけ
まだそのへともなく面がりして
とりきはうとましげまやあし
とそひあつるまこゝありしながら
などいふまに泪のおつるをまぎらはし
さくうつづしるをいと哀まこ給
さてそのつくへよとあるらん文いと
のあへばあむとり あをまひのうへ
いとさゞやうなをしまきさるうへ
より あやしう物哀しまして
物の心ゆかしかれば あけて給とて

よろしぬへれあらむやうにもあるかな
我ながらなどうくくしかんとおく
ふこゝあくこゝあしながらのまな
まだ筆のりがたもまよひかる
かとしるしこしこ すこつ見かれず
いとひつきてし名れさしやうで
ふくらびおなじうあ世まぞふる
まよはをしんれやうをしかりも
ほしのたはいまそうれしき とあ
るをこあふまいとじうかなし とん
うりなあらひあつる ゆ物の事とうろ
をはまくなん ほのぐと此り宮れ
むかりにいふましなうきよらまて
物をふくあられと思あつるゆ事又
いとじうなまめかしくしんこあふを
このまもいとめてこしと打ほりり

ゆるりじめそぐひくすおまし
さくのるよのこころちしとあわ
ちさきゆるくうつけやこりる
人いこでよくねこゆやすめの
きそぐるんぐ後もうちくて
ひうしくうやおけるでいれば
年いるあそきもそんとそうを
よ(ほ)めぐのりくのせうそこるお我
とうをいこひのけるばそれめさる
らふるさゆよまでいくりけ
こよくんえぐこと称そのひの
もそ私こけん人くそいうもやわ
するうこさぐれのめくいたを(た)めて
よりゆしまーやうたぐあさタ
ねそのこさ後くいこぐうお
ばーぐこゆくもおそいる

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

いまとしふぐるに、世にあることはかくれ
なげなるを、あまたへりなん。[句]あなど
きてつけなて、ことごといでき、なれ以ま
いとごとがこめもよしなるべにこと
をとのなふ。[左を]やがて車をおさせて、
いそぎのりて出れば、[行]かどすこし
やりすぐる程にをしとゞめて、[詞]おりて
かくなんとゆくなへといへば、入て[小君]さ
なんといふに、[浮母詞]なにかことくしきこゝめい
てあなひしなこゝるへといへば、
[左を]うちとけたるかたへ入ぬ。おのうてな
のめうつし、いとゞしなぐしかしぬ
んちして、[ひたち]かたもこゝにぬたる程なり
かり。[浮母詞]しかけぬれとまいりしており
りしたるにかこゝるこゝびにさしのけり
ぬまさりなりのかな。[いそつ]大将殿第に。

かくしゆかりをそへしかぐまへまつる所に
ぎしをこゝろなるにつけてもおつせまし
かば、さるかたにんのどうふこゝそこ
ゆしましとと、しふにつきせずかな
しおとてうちなけば、[ひたち]かたも此殿
の所にとゝのよろしげにかたしげな
き。男れほどにてすぎたる所あべこ
をよろしびしなふるんふかれど、
ゆしさきんにつけても、とそれにし
なひつまれてまかりすぎ侍る。びん
ぎにまたにさきなにけつし、なへ
これまたごとあ[大]ぶれ所ゆかりにをあて
の所なさけうけさせなふとこなれば、
うづかりその所ひかりにあたるべし
とやしゆしとかたしげなく侍る。
ましておとせましかば、いかにとは

おしくすんせひまつて御大将がに
つうさつり給つるにつがひまでもまた
し人ともおぼしず。いとこそやん
ごとなけれなどいひちしてこゝろ
めり。母(浮ノ)若(比)かうのかく心ぐるしかげ
まぐも。おもぐてさくせふべしおり
つる人ぐも。さうくもりかくれなどして。
すこしさめやうまなりぬるに。ちかく
ぬよりて。思(汨)くゆくさすべきと給
て。まいりぬるといふに。つぐ(浮ノ母汨)のなんと
ゆたぐさ給へば。さづ(左を汨)かるにはあさいぎ
をいさめゆくさきんとてなんこゝ
ゆるにしのんを。はこぞこそゆえ
なにめと心へば。いぐ(浮ノ母汨)やあこのいふ
らんことにはたかぐしうしどいれ
そう(左を)給かくしてとこがましとせる

かしきにはくにはくとり出てなれば
あゆ(浮ノ母人)しとていそぎあけられども。
うつくしき人のさひよりべきとよ
あしぬだ。さがしんもえずまかり
ぬるにかうしぬ筆の絵にもて
りまるに。さすがそれとなしぬる
んち。ゆくなふことへむ。こゝいり
なることにかとこゝれふしぬれば。思
つることゝうなしくて。かく(汨)おがしま
どうん行に。人もあまたきてにあ
しうりなん。さりげなくせさづめ
給へと。ゆえさすべくのなせつれ
ぞうくさいり給りつるなどさぬぐ
こしらへられて。どがり(浮ノ母)んまどひと
さづめておきあがつまつてさてもこれ
そゆめるなふぞとあきれまどへ給

どもうるさゆしうる人を。ひぎと
ごにこへぬべきらのおしをまけ出
て。人めさげきすさひたうたて
あらんとらひまぐらうして。うち
そむきゆるうくいしめ。いひさら
ずおりしげするを。いと(浮世)さくかな
と思へり。(狩)狩とそくもなまかさのこ人
めさけう侍らん。ことにしら出まじて
つくらせ侍べきなど。ゆんまつて毎
まゆしなすも家なりさ毎ぐ
なるきぬあやなどしらせらけ。
とりおく。(浮)如意の御まういさら
にもいとす。あさ。意まも一本せさ
まぐなりこれだ。又なさ身に
よろこひさいぎて。抽さびした
君意どもなど。めさめこるいち

なんしけるうらんもやがて立と毎
らさかしくしひこれだ。かがり(浮狩)心
がそこさすさぬまふくこもりてい
いりふさてすぐさん。いとあるまじ
きことのなひく
(浮)あらぬ世としひなしつる。此おい
くまなに侍きて。抽ぬらすらん。と此なべ
(左を)こちうつるなすごりごにかくな
しきになかき別とおもいましが。
とゆえく。いこじうしひ。みちす
がらこるその御こりの山きへ。す
うまとをうなるまらに。いとぐんかそ
くて。(中略)うしこまを又なごりかな
くて。ながめなふまぎらうしま。
(浮北)意を例乃ごやれをこなひま心入
すべし。うらんをそのくれまを覆へ

こそなしめ。志のぶるよしは申し
しることのうりまもあふなきうと
はなけれど。宮のはあらりまて。我を
さぐらはひしんことを。りをのづ
ら。ゆのうれなくて。かのきくへも
あしがなど。はありきくちすらも。
ましうこのうしみ乃るを
とけぬ
うるべし

大上天皇

葵の夷は位をゆづりてありなさ
う木のまゝにうれなぬ。桐つぼのはかど
なり　ひき付は相帝ともあり

東坊

秋好中宮（あきこのむ）　母は六条の御息所

故院のはりしうと葵に尺くらり
葵は無宮にこちなこがづく
はなへ御しをな綸合は四に集り
なて。桐つぼしと申さ。し女に中宮
にこちはは皇后宮にあがらせ
なひき付は無宮無ねともあり

桃園式部の宮

うをな出産せ。其は尺
えたり

槿の斎院（さいのゐん）

はりまにりものいつきまゐなうす
雲に父此は服ふよりてありさせ
な。桃園宮は女五の宮とあひすま

せまふ　ひきけに様とあり

三の宮　院のひとつ御腹し、桜殿の北方に
なりぬ。家だらせ此事とりくく
れまふ　ひきけに大宮とあり

女五の宮　枕屋宮に住まれ給ひ給ふ也

朱雀院　ひきけ朱　母ハ弘徽殿の大臣
相つぎ給ひて春宮、葵に御位を
つきぬ。こゝおぼつくしに位を春宮に
ゆづり。あなたにはぐしおもひて。
西山の御寺にすませ給ひ。春
六条院御かへの事に。一院と此御間

今上　母　藤香殿の女御
明石の君に二歳とこゝ也。こゝおぼつくしに
春宮、桜殿に御元服。あなたに
位につかせまふ　ひきけ今上

女一の宮　ひかるのとしにこゝ也

藤壺の宮　母ハ一条の御息所
あなのもに。柏木右衛門の督の北
方になりぬ。後に夕霧の大納ひくく
らひとりまふ

二品内親王　母ハ先帝の源氏の宮
ひかるとしに六条院にひとりて。
同下に二品しぬ。柏木の夷に忌
とうこゝまつり　ひきけに女三

女四の宮　ひかるとしにこゝ也

春宮　母ハあかしのゆゑ
あなたにひまれまひて同下に
坊にのまふ

我ゆゑの宮　母ハ春宮に同じ
まほふ宮の夷に夕霧の中宮

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

をとして六条院の寝殿をやすこ所
にしまし二の宮と中ゆかげちふに式ゆ
白氣の宮　母同上
あるゆるに生れ給ひ白宮の御事に
ぞ張して氣の御事に倒ず紫の上
やしまひまし三の宮也　ひき付白
若君　母宮の御中の君
やどり木の巻に生れ給
常陸の宮　母ハ宮衣
白宮の御事に夕霧の大将のりたの
かりあるじ志なし日氣の宮
にまゐひとされし人四の宮と中ゆ
中務の宮　母ハ同上宮
同きのりたの日夕霧大将まゐ
きよきて車にの世なし五の宮
あづまやに大宮の御事やこの時

まりなし又やどり木に上野のみこ
と御上にさふらひ給しく人
六品の宮　母ハ同上宮
これも紫の上やしまひまして六条院
の南の町にすゐをなし若大将
にかけなりし人
女二の宮　母ハ前つぎの女御
やどり木に内の御さしまして若
大将をむこにしやあふ
六条院　母　相つぎの宮衣
七条にて源の姓をあり十二にて元
服さしまゐに中将紅葉の加えに正三
位中将紅葉同巻に宰相中将紅葉　菱に大将
すゑの巻にかの海にくだり明石の
巻に都にかへりまして夕ぎのかへり乃
捨大納言になり二あづくしに内大臣

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

うすぎぬは御位そひて。牛車（うしのくるま）のもんじをかうぶり。し女は大殿ばらい。前のうちくは大と天皇の御号をえあふ

夕霧左大臣　母ハ葵ノ上　ひき付源

ミおづくしは内。春宮の昇殿し女はえ殿してあさぎにてかうりのがる。同宮の秋隆目ふりうふりあふ。朱雀院行幸の時御頭まゐる。玉かづらは中将。前ばかりは宰相（中将）前の裡葉は於中納言。あるは右大将。同下に大納言にて左大将は騎ず。白宮の表は右大臣（大将）竹川は左大臣（ノ）琴大将（ヲ）

薫右大将　母ハ朱雀院女三宮

柏木の表はなれあふ。白の宮の表はえ殿して。四位の御頭と中也。其秋右を中将（年十四）同表に三位して宰相まゐる（中将）竹川は中納言。やどり木の二月なをし物は。按大納言にて右大将を兼ず

明石中宮　母あしのよ

ミおづくしの三月は。明石の御事生れあ。松風はなりて大外は御あ。落雲は六条院へむかへ給。前の裡葉は春宮へ参りて。しげいしやとゆ也。御法は中宮。白宮の表は白き衣宮

右衛門督　母ハ三条ノ上

若子下に朱雀院御賀のしぐくの時。けしはまて参りき。女楽の取。横笛吹ところ也。白宮の表はのりちの日出仕せし人。又まりふ名ハ宮。

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

中宮にて紅葉ことあし日、中宮
の御つかひにてまうでたるよし
あげまきにはんしたり

中納言　母右門侍

六条院家の御方むかへてやし
なひ給ふ。次ぞ朱雀院の御賀は
しぐ。同き十四日あるべきと同く
まりあるよし。あるまじにこそ。白
高は春にのりちの大夫の婿
とおもしくおはせしへ

右大弁　母三条上

白高の春にのりちは日出仕
せしへ。椎がりとにうぢへ来り
たるよしこそ。あるまじにこそ
といへり

侍従宰相　母これともなし

椎がりとに白高のいつきまうで
の時宮ばへ来りたりしへ

源宰相中将　母三条上

もとは蔵人かね行げは三位の
中将。同夫は宰相中将。志ぬ所に
權中将といへり。又まかりしは
春に同じ頃にてかたり所上
しあふといへる。此人ことにや

頭中将　母右門侍

行げは源かねとたり。やぎり春に
白高六条にうよひそめ給ひ時。
又おとゞはつかひまて。まつよひ
ゐてこつたしへ。椎本は頭の
中将といへる此人ぬべし

中位かね　母三条上

一品宮はなやとの時横川僧都の

りとく中宮の御つかひとして人行
川は玄蕃佐、志ある本に藤人
玄果紙とらへり
童（わらハ）　母これとしなし
やどり本は今上（えじやう）の女二宮なり
えんしゆし時、笙吹ふりし人
七郎君とてあり
春宮女御　母三条上
白宮の御ことは、春宮へ参らせ
中君　母おなじ
二宮の御のこと
三君　母右内侍
四君　母三条上
五君　母同し
已上三人夕霧の御まことは
六君　母右内侍
やどり本は、白宮の御れ方に御

宮ゟ宮へ宮
りとは帥宮（そのかみ）、し女は朱雀院の
行幸の時、宮へ宮ともうさせ
つかしし紅葉まゐらせり
侍従　母りとの御のこと
柳殿は六条院より、ちとれ御
つかひまて、御本（そん）とりかし人
童君
同
此二人ある下に、朱雀院の御賀に
しぐるは、万葉集まひ
宮御（そんぐ）方　母まきがしらの上
父うをあて後、母君はぐして、
柳案（あをち）大納言のりとまゐらせ
白宮へ宮ことなしすべる
まゐし人

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10
ガラス使用

四宮　母兼香殿女

紅葉がうに、ひらはまて秋風来まいなし人

帥宮

宮は六条院の高塔のおとゞまを
あまれ給ひて宮はけらひをとりて
見て給ひし人

八宮　母大臣女

宮は[illegible]りなし。橋姫の[illegible]
[illegible]の宮と申れ　ひき付八

総角大君（あげまきのおほきみ）　母大臣女

あげまきの[illegible]をなし　ひき付大

中君（なかの）　母おなじ

あげまきに[illegible]にあひて。
早蕨は二条院へむかへられ　ひき付中

浮舟　母ひたちが今の小方

ゆどり来にひたちよりのぼりて
東屋に宇治にうつりなりて

小野にはうつりなり　ひき付浮

弐アマ宮

東屋の[illegible]にむすめの事。[illegible]
大将よりしれとりし人。[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]　母もとの小方

[illegible]　母同し

父こやうをなて後。あしの一条
の宮へ来りなふかりの大将こと
[illegible]しなひし人

[illegible]　母うすきの女院

葵は[illegible]
[illegible]
[illegible]　ひき付冷

一宮　母ひげくろの大臣のむすめ

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用

あつまる　朱雀院（すざくゐん）の行幸（ぎょうがう）の二月十日
皇太后宮（くわうたいごぐう）　まいる人
中将
侍従
民部大輔
　　　

中将。こおづくしに捨中納言うす
もとに捨大納言にて。左を大将を
勤ず。し女は内大臣。なのうしだに
大政大臣。ひるなりは致仕の表を
てさりなふこをなつるよし白文の
書とはみ四 ひき付み

左中弁

第一集に。ふ山へ源氏の所むかへ。案り
し人。むの事は中将。弁なしまつり
あひてとつるも。此人なべし。夕がな
の事の義人の弁も此人にや

後大納言

美ぐ女の大夫

此二人は源氏三条の家へひきりな
し時。致仕のおとゞひきつれて来り
給し人也。かりがちのこぎとあり。

し女は左衛門督。捨中納言と中将
なも此人ぐの事にや。さうらだ
五節(せち)なりし左衛門督なべし

葵上　母三文

あふひの事は夕霧の兄をうこ
をきてうきな

柏木権大納言　母二条左政大臣女四君

し女は左をかね。こてふは左を中将。
うりぬるは中将。ほうなしに宰相
右衛門督。同りは捨中納言。柏木
実はかずのわりの捨大納言なり
なりて。かどなくうきなふ

紅梅の大夫臣　母同上

さう木はひらなりて。韻ふさぎ此ま
けはきの日。たうきごうこひしく。
こおづくしはえ張。とつねに弁かね。

こうなどは公弁。おなし下にた
大弁。柏木は大納言かぎりなし
時。一条の宮の御ほとゝ御ほとゝ人
すゞ虫は冷泉院へ参りしもしは人
なるべし。紅梅は按察大納言と
こゆ。竹川は右大納言左大将
かけたる右大臣はなかしといふ。又
椎が本は白ゝ木のよろさまうで
のゆひかへは参りし右大納言も
この人なべし。やどり木あつまや
はいたりて。按察大納言といふ不審
大史　紅梅は。ひらはまて云ふ此
文。いもうとの君のまゐ御人
紫京殿女御　母故北方
紅梅は其ゝ家へ参りな
中の君　母同じ

左衛門督　とゝ文に右衛門とよ
はこの人なるや
右宰相
あなたにかものまつりのかへさし
人は二人は夕霧のおとゝ此六君は
云ふ人宮かよひそめなし第三夜
さふらひし人也。すゞ虫は六条院
はしたがひて冷泉院はまいりし
もしは人なや
頭中将
義人かね
は二人幻の君は夕ぎり此君たち
ひらはなしなつ時。あひぐし
たりし人ぞ。どちの君ばらといふ。
又夕霧大将。一条宮にかよひなと
こそて。この小将をつかひまて。又

おとゞ。衣とせひうちめしときく
とのみき。いとしし女はか細さ。今
衛佐。侍従大夫と侍りしも。
まうなにまりの時。今来佐。大夫
といへるもしくゞめぐし
八郎君　まきゞしらは踏斤の時
いたはまてまし人。女の裡葉の行
幸は。賀王恩まひしもしき也
玉鬘の尚侍　母タガ御のうへ
四の年タガ御のうへのめれとに
ぐしてつくしへぐたり。年へて玉
鬘の事は京へのぼる。女ゞ多く
内侍。まき柏は。ひげぐろの小方
まなりなふ
弘徽殿女御　母は柏本は同
こおづくしは十二ふて内へ来ぬふ

タ雲の大臣室　母は柿本大納言今は本官
さらぬれかりもと口ずさひし人　いきは
玉鬘の君　母これ先なくなのりし人
●二条太政大臣　いきは右大臣
朱雀院の御母方の祖父ゞめは
右大臣。明石は太政大臣まてを母
なくなりしこゆ
女大納言
次弁　御方木は白虹日をつらぬ
けると諭をし人
兼京殿女御　朱雀院御くらゐ
の時の女御。さう木は尸内
宮位が相　父おとゞ女のえんし
ましおり。源氏の御むかへは来り
て。むさなべてのなれなりけれ
し人

右中弁　此二人は源氏おがろ月
夜の日来ころゆきしくて、小の陳
の車に人をつけてこをかしとき。
弘徽殿より出る人の所をくりせ
し人ぞこし。又所ゝ木の夜ゝに中ね
ゝのさけなどいへるもしけんにまや
弘徽殿大后　ひきは弘徽殿、又ゝ施后
朱雀院の所母。あふひは皇太后。
うをなめるよしあるよしにて人也
宮師の家の小方　むのえんの夷にこも
設代の大臣家　四夷と申しき
五ノ夷　むのえんにまんしより
藤月夜　当侍　ひきは勝月
あふひは朱雀院に参りてこくし
げ殿と申也。所ゝ木に内侍。あるを
申に居にすりなし。六の夷といへり

●右大臣　こゆきより桂様にいたり
ての右大臣どの人ゝるべし
女御　冷泉院所位の時此女御桂様にこも
●右大臣　桂様に右大臣にあるに上のもしけんにて
大臣ゝ
修理大夫（しゅうぶ）　此二人若ひとつ所様にあふ後
殿臺ノ女御　今上青宮の所時より来
ましが、所ゝの中宮にをきれまき。
女二宮ばかりをうこなりうをなし
やどりこきに見えたり。又桂がしう
藤原殿とゆゝし三ノ夷は人にも
●右大臣　行門右大臣と号す
女（おとめ）　多賀のおとゞの所に。宰相の中将。
くゝ人のおねとゆゝし時。おひそ
めまひき
●右大臣　今上の所祖父。所ゝに太大臣とも

同し夫々に大夫弁

[illegible]の中将　母おなじ

竹川に侍従、同夫々に[illegible]の中将

真木柱の上　母中納言に同

ワクタ下に、常の[illegible]の家の小方に

なりこやうせなて後、紅葉大臣、[illegible]

家大納言と申しし時、小方に[illegible]

[illegible]まき柱は[illegible]をとるなど、[illegible]れ

おしえし人

[illegible]　母[illegible]の内侍

竹川乃宮目に次ぎ[illegible]へまいり[illegible]

夕霧の[illegible]宰相中将、[illegible]人[illegible]

と申しし時、[illegible]人

[illegible]侍　母[illegible]に同じ

竹川に母のゆづりをうけて内侍に

なり、[illegible]へまいりまふ

●大臣

[illegible]　十六にて[illegible]へまいり

[illegible]をとりあり、十九にて

こやにをくれ[illegible]、[illegible]

[illegible]よくして[illegible]

[illegible]

まふ　ひき付[illegible]

●大臣……[illegible]　宮[illegible]の八宮の[illegible]

●大臣　[illegible]二人[illegible]

[illegible]

宮[illegible]の家の小方　これ九尺[illegible]

常陸[illegible]小方　ひき付[illegible]母

宮[illegible]の小方のめい、[illegible]中将[illegible]と

て[illegible]、小方[illegible]

後、[illegible]の[illegible]をとりあり、後に[illegible]

こちにぐして、[illegible]

大臣

入道播磨守

辞して播磨守になりたるの国に
てうしらおろしとらんゆ
とうなるとは博士をさりて源山
にいりぬ

明石の上　母は中務親王のむまご
松風まうの御をいなれて大井
ますしが上女は六条御息
にいりて、女の御方とゆ也

按察大納言

もう女院律師
源氏の君の御をぢ、法人なりとも
なくなり、御方本まるん也

桐壺の衣　源氏の君をうしに給て、三
とせといふまいりなくなりぬ、かゞり

こそまうで給る時、輦をゆるさる
名迎給ふようす、三位ををくる

按察大納言し案上の母

按察大納言し右衛門君

し女ままひ給ふなりて、やがてさふら
ひき、かゝりのむまめとあり

大将

左近の将　ひたちのすけがむこ

撰中納言

右衛門督かけたりとも

左衛門佐　源氏中川のうたなどへの時、
いらはまくまくしふ君なり、いまうと
のおとこにぐしてひたちへくだり、せ
きやまのぐるうつきの君をとし
まゝ蝶君　は中納言うをて後、いまれ
すけがつまゝなる、又ひたちになりて
くだりし時ぐしてくだり、せきやま

京へのぼりて、同年にすけまを
くれて後、尼になりて、二条院の
ひんがしのゐんにすみき

●右衛門督ー女　母をのこ尼
中将なる人の小方うちはしたる事なるに
●冬議宮内卿ー明石乳母　母院の宣旨
源氏かくしいとりて明石へくだしーな
松風にあぶれまぐしてなへのかりぬ

三位ー中将
夕顔ー上　程ばの中とぐ、蔵人ー中将
と申さしし、ひかよひて、おぼつかを
うめり、其頃夕がほのやどりて、
源氏にあひ、なかがしの院とかや
まくらのにとられてうせぬ、年
十九

宰相ー宰相ー君　おぼつかの女房

六条院にすみしかし、此人ぞ此返し
かきし人、竹川かりかに家よ
かけしもこの人にて

●冬議前源惟光　母大和乳母
いづめは民部ー右将とぞ也、し女に
はのなまて、左京ー左史かけたり、
柿がしに宰相

兵衛尉　童にて家ぞをゆかされ、
いもうとのみ、さらにかゝ書の文
つかひしかしはつかひなり、柿
がしに右衛尉、みぎはにうげ
まれしとき柿がりて来りし人

岩典侍　みぎはの事ぬ、夕ぎりの
おとゞ此ひんべいかなりに内侍
とぞ也

山阿闍梨　惟光がおとゝ夕顔に沢り

お物の官殿　夕がほの来るに入侍
三河守妻　夕がほに大臣のあまの
なやうに時ありき

●弟播磨守
源良清　まう業に蔵人にてかう
うりあ。ありしにお物をとらせ
こゝめづくしに剃屑伝をとめに
右中弁にてをいつ守を兼ず
お節　し女の来るに御になりし
に。やがれさふらふよし入侍

●左中弁
宇治宮の方母をとらせ
いつり
弁ノ君　母は柏木のめのと
女三宮の侍従のめのとのめ
かりの大将に背の手中にし
人ざ母をくるよしさいらひに
ふ

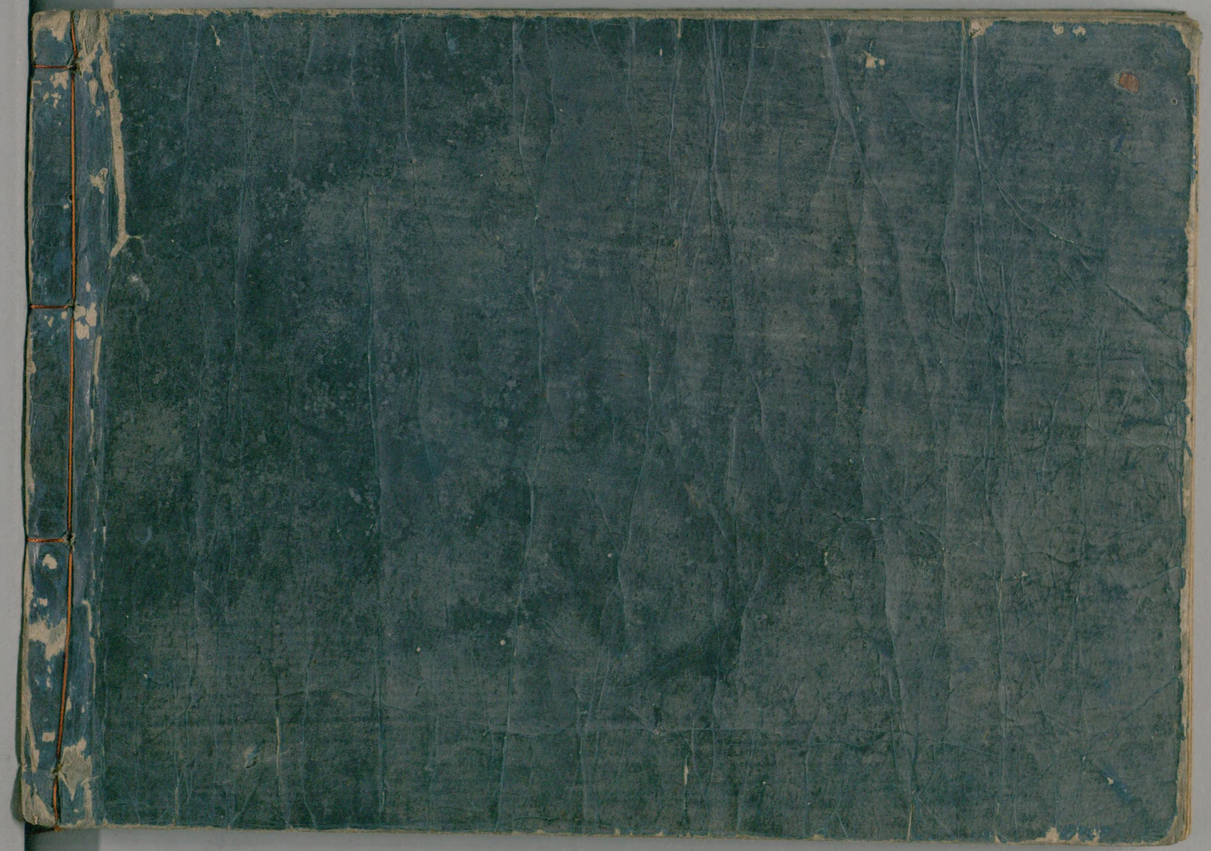
●伊与ノ弁
りじめは伊与にありひたち
よりのくをまやにのぼる同来に来ぬ
几伊与　源氏ゆるたなぐの中川の家
あるじ。ささやに河内守になる。夏
ありしはしきぐに入侍ゆる也
蔵人右衛門監　源氏の大将にて無法
の御禊につかうまつりあし時。
一貫さしたりし人なり。大将は海
の海にともしきあしあり。あるの
ゆかぐらづられ。くりのぼりて。
ゆげいのぎうになる。松風にかう
うりありき
蔵人お物妻　宇蟬の君のむすめ。
源氏うつをこのものけの東あひ
まて。おんぐの荘をむすびずんと
よしてつかうしたりし人

常陸の介

856
10

国立国会図書館　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『源氏物語』　請求記号 856-10

ガラス使用